



## 野蛮から生存の開発論 ——越境する援助のデザイン

佐藤 仁 著  
ミネルヴァ書房  
本体3,000円+税

かつて「開発」という言葉は、欧米の「文明国」が、アジアやアフリカの「野蛮」な国々を開化させるということを含意していた。日本もまた、欧米に負けないようにと文明化の道をひた走った。

しかし、温暖化問題をはじめとする地球規模課題の増加に加え、先進国の景気低迷とアジアなど新興国の経済力の強化を受け、世界は今、「文明」と「野蛮」という二項対立とは異なる視点で人類が生き延びる道を考えることが必要になっている。

このように「開発」という概念の変革が迫られている中、本書は開発に関する多様な課題を根本的に考え直そうという野心的な試みを提示する。

著者はまず、「貧困とはそもそもどのような状態を

言うのか」という開発の根本テーマについて、開発経済学の泰斗であるアマルティア・センの思想に寄り添い、時に批判しながら問い合わせる。さらに、ドナーと援助受け入れ国の意図の食い違いから発生するさまざまな問題を詳細に記述した上で、近代の工業化の原動力となった分業体制がはらむ危険性など、先進国や開発途上国が共通して抱える社会構造の病にまでメスを入れる。

開発経済学の古典や最新研究、著者自身のフィールドワーク経験、文学作品から得られる知見を縦横無尽に駆使し、途上国開発や地球全体が直面する課題に対する創意あふれた解決策を探ろうとする論考は、読み応え十分だ。